

について、發達した頭を持たぬ爲めだといはれる。華僑はこの他に、質屋、高利貸、送金事業等を獨占してゐる。が、銀行的金融機關は、歐米人の掌中にある。

近年日本品の輸入が盛大になつて來たが、これを取扱ふのは矢張り華僑なので、日本對華僑といふ問題が起つて來る。日本の支那及アジアに對する政策の眞意を、これら華僑が正當に認識するか否かが、日本商品のタイ進出の盛衰の分れ目である。

佛印は、今まで佛本國の排他的政策の爲めに、外國の資本の投下がないので、經濟的におくれである。殊に、佛人と關係のない事業は甚だ振はない。

この佛國の獨占主義は、華僑の活躍舞臺を狭めてゐる状態にあるが、しかし矢張り農民との原料の仲買、(殆ど獨占) 精米業、(中小の工場は、安南人と共に華僑の經營、言ふ迄もなく大工場は佛人經營)、米の輸出入貿易は華僑の掌中にある。國內商業は全部華僑のものである。又、買辨は、縦横に活躍して、外國資本家の代理をつとめてゐる。

華僑労働者は佛人經營の鑛山に働き、又、沿岸漁業に従事してゐる。しかも安南人を常に壓してゐる。

英領馬來は、殆ど華僑の王國である。華僑に取つて、こゝは數よりも實質の場所であつて、その密度は非常に高い。馬來には、華僑と馬來婦人との混血兒のババ(支那語の峇峇)が多いが、

それ程華僑は馬來に深く入つてゐるのである。

かのシンガポールなどは、人口四十四萬五千のうち略七割を占め(華僑三四萬、馬來人四萬三千、印度人四萬一千——一九三一年調査)、華僑の都會を成してゐる。

凡ての華僑の弱味は、政治的勢力を持たぬといふことであるが、馬來の華僑も政治的には英政府の支配の下にゐる。然し、シンガポールを華僑の都會とし、偉大な經濟的勢力を掌握してゐる事は、雜草とは言へ、華僑の強味である。

華僑の活動分野は、取引商、小商人、農業(福建系にして華僑中の三一・%を占む) 錫鑛、栽培業(廣東系にして、華僑中二四・五%を占む。これに潮州系があり、一二・二%) 錫鑛労働者(客家系にして、案外多く華僑労働者中一八・六%を占める) 都合の家庭労働者、ゴム園労働者(海南系にして五・九%) 等である。

馬來華僑の主要な事業は、ゴム栽培であり、それに次ぐものに世界第一位の錫があり、(錫は、近代科學に依る新式採掘法に壓迫せられ、舊式方式の華僑側は漸次衰退にある——) 鳳梨業がある。この世界的な鳳梨業は、殆ど華僑の獨占するところである。

水産業は、今までは日本人の方が優位にあつたが、支那事變以來凡ゆる手段で日本を壓迫しようとしてゐる。

商業方面に於ける華僑の勢力は、斷然拔群であつて、こゝでは金融方面にも進出してゐる。蘭印には百二十萬の華僑がある。矢張り福建系が一番多く、客家、廣東、潮州、その他の順となつてゐる。

その分布は、爪哇マヅラ、スマトラ、ボルネオ、セレベス、バリ・ロンボク、モルツケン、ケモルとなつてゐ、爪哇マヅラは五十八萬二千人、スマトラは四十四萬八千人で、斷然群を抜いてゐる。(一九三〇年調査)

その職業は、商業、産業、工業、交通、自由労働、官公吏等の順である。商業は雜貨小賣商、行商人が多く、貿易商は少ない。

農業労働者も非常に多く、地方に依つては木材業、漁業、鑛夫が入込んでゐる。

工業方面について富田芳郎氏は「南洋華僑の經濟的機構」(前出「南洋研究號」)の中で、次のやうに紹介してゐる。

「工業方面へも企業者とし労働者として活躍して居り、製糖業に於ては華僑製糖場は數十年前に四〇を數へたが、一九二二年には一四となり、更に世界的經濟恐慌によつて著しい打撃を蒙り、今は僅かに五、六を残すに過ぎない。然し精米工場、キャツサバ工場、ケチャツプ工場、コブラ製油工場等には優勢なる地位を占め、花火、石灰、煉瓦、石鹼、煙草、製材、製氷、印

刷等の小工場、又手工業として製帽子(バンダン帽竹帽子)、裁縫、大工、家具、靴、金細工、鍛冶、錫工、自轉車修繕等雜多なる方面に進出してゐることは著しい特質である。之といふのも爪哇は人口稠密で、勞銀が低廉であることから、歐人の大規模なる企業の下に在つて、中小企業の下に在つて、中小企業者として、家内工業や手工業方面に華僑が地位を獲得し、土著民に對して原料や賃銀を貸與して其の勞働意欲を惹きつけてゐる。爪哇更紗の如きベチック工業に於て經營工場數は爪哇の合計で、土着人三、五一五、華僑七二七、アラブ一三〇、歐洲人一二(一九三一年)で、土着人より少ないが、労働者の家内で行はれるものに對して、原料の前貸が金貸の形式で行はれてゐることの多いので、華僑の勢力は上述以上である——」

フィリッピンで、華僑が通商に活躍したのはスペイン領有當時の夢となり、米領の今日では入國禁止の爲め非常に少ない。今はせいゝ十一萬内外である。

こゝの華僑は、福建が八割を占め、廣東はやつと二割だが、南支人に限られてゐるところに、特異性がある。

フィリッピンの華僑は、植民地華僑本來の特質を充分に發揮して、歐米資本家と土着民の間に物資の仲介者として存在し、兩者に深い結合を持つと同時に、兩者から利益を上げてゐる。

その職業は、商業、高利貸、錢莊、米の賣買取引、生産業(米、麻、煙草、木材、椰子、砂糖

コブラ、酒、その他の農作物)等である。米に關する仕事、買辨は、華僑の專業となつてゐる。然し、フィリッピン土着人は、獨立にそなへて、一九三四年より全國經濟擁護協會 (National Economic Protectionism Association) 即ち NEPA を組織し、島内商業の華僑からの奪回を圖つてゐる。これは、一面經濟的であるが、それには民族運動の意味が多分にある。こゝにも、華僑の將來と、歸趨の問題が見られる。南洋一億の民族は、その民族意識に燃え、我が民族の南洋を、再建する爲め、必ずや華僑的寄生蟲を排撃するであらう。又、この運動を通じて、白人に抗するであらう。その縮圖が、現在のフィリッピンである。

### 三 華僑振興論

ところが、支那には支那で「華僑振興論」がある。参考の爲め、次に一文を譯出して見る。それは即ち「禹貢」に載つた許道齡の「南洋華僑没落の原因」である。曰く。

南洋といふ名前は、大凡國內の知識階級の腦裏に印象づけられてゐる存在であるが、これは亦そこが華僑の中心であるからであるし、而も且つこの境域が我國に接近してゐるといふ緣故があるからである。思ふに明以前にはたゞ東西洋があつたばかりで、南洋といふ名はなかつた。張燮の「西考東洋」卷五の「文萊條」に「文萊は即ち婆羅國にして、東洋の盡くるところ、西洋

の自ら起るところなり」と云つてゐる。

此れに依つても、現在所謂南洋なるものは、實際上即ち明代の東洋と西洋の一部分であつた事が知られるのである。その當時の東洋といふのは日本三島と菲律賓群島までを指していひ、そして西洋とはマカツサ海峽の西をいふのである。今日の南洋の範圍を、之を要略していへば、即ち佛領印度支那半島、シヤム(タイ)、英領印度支那、蘭領東印度支那、ボルネオ、フィリッピン群島等々の地である。その面積は百七十萬平方里で、約我が國の三分の一強を占め、人口は一億ぐらゐで、約我國の四分の一弱を占める。地廣く人は稀薄で、氣候は溫和、その海拔は四百メートル以下であるからして、農業に便利である。且つ文化も後れ、工業も發達してゐないので、外國の貨物を需要してゐるのである。これこそ眞に人口過剩の國家の好い植民地であり、生産過剩の社會の好市場である。

かく説かれる通りであつて、彼地の客觀的條件は凡て甚だ移民に適合してゐるからして、華僑はこゝにあつて悠久の歴史と鞏固な基礎を持つてゐるのである。

政治上にあつては、明の永樂年間、梁道明は會て三佛齊の一部を占據して王と稱し、陳租は會つて舊港の頭目となつた。成化年間、謝文彬は暹羅に仕へ、位「坤岳」(思ふに支那の學士の如きものではあるまいか)に至り、嘉靖年間には、林道乾は淳泥の鑛山の外事係となり、萬曆年間に

は閩（福建）海の海賊李馬奔は曾てその乾兒の一國を率ゐて菲律賓に居据り、清初には吳尙賢は黃耀祖に黨して緬甸の國境に遁入し葫蘆國王となつた。

（按ずるに、葫蘆國は、一名卡瓦といひ、永昌を距ること十八程のところに在つて、古代より緬甸に所屬しなかつた）

乾隆年間には、鄭昭はシヤムに仕官し、位宰相に至り、後緬甸がシヤムに反抗するや、昭はそれを克服し、民衆に推されて王となつた。その他越南の王族阮氏の如きも、亦支那の血統であるが、羅芳伯、陳蘭芳、葉來……の諸人も皆な曾て一方の長であつて（くはしくは「南洋華僑植民偉人傳」を見よ）、實に華僑は南洋のうちにあつて政治上の權威を握つてゐたのであつた。

經濟上にあつては、「續續文獻考」に「（爪哇）新村の村主は廣東人にして、蕃船はこゝに至りて互市を爲せば、金寶充溢す」と言つてゐる。英國の前總督シュテイセンは「馬來各國の今日あるは、中華人の力を多しと爲す。吾人の草創の初めには、全く中華人の財力に頼み、以て道路の平治を得、大いに土木興り、行政の費はこゝに於て助く」といつてゐる。

一九一二年、菲島の釐務局の統計によれば菲島の商人の數は中華人が最も多しとなしてゐ（三三三五人）、菲人は尙ほこれにつゞき（二二五二人）、西班牙及アメリカ人は二三百人に過ぎぬのみである。貿易上の貨物の賣上代金も亦中華人が最も多大であつて、總計三億二千萬元を超過し

てゐるが、菲人は八千萬元に過ぎなく、西班牙人及米人は僅かに四千萬元に過ぎない。これにても華僑が過去に於て南洋方面で經濟を牛耳つてゐた事が見られるのである。

社會上にあつては、どうであるかといふに「宋史外國傳」に「閩婆にては中國の賈人にして至る者を、賓館を以て待遇す」とあり、「島夷志略浮泥條」にては「佛像を嚴に崇奉すると雖も、尤も、唐人を敬愛し……」といふ。これによつても、華僑が過去にあつて、南洋の社會上に實に第一の素晴らしい地位を占めてゐた事が見られる。

かく説かれる通りであつたから、華僑のこゝに於ける各種の地位と勢力は皆な當然日毎に向上す可きであるが、これに反し没落に向ひ、時に商人の破産するのを聞き、失業の勞働者が陸續と踵をつらねて歸國するはどうした事であらうか？ その中の原因は必ずや大いに複雑であつて、僅かな言葉では言ひつくせぬが、茲に見聞するところをば、四種に略述すれば左の如くである。

（一）國家の衰微 此の優勝劣敗弱肉強食の世界にあつては、人民の需要するところは國家の保護と養育であるのは、まことに嬰兒が慈母を求めると一般である。然し内地に於て生長し、祖國を離れた事のない人々が、日々政府の壓迫を被り、輾轉として死線の上にある同胞を見たならば、この種の環境の下にあつては、或は只に國家を愛さなくなるかも知れぬのみならず、却て恨むやうになるのである。然したまたま機會を得て外國の領土に進出し、強國人の威風、自由、幸

福をはつきり見、尙ほ翻然として反省し、國家を愛す可きことを覺えないならば、これは毫も愛國精神がないのである。人民と國家の關係は實に甚だ密接である。華僑は過去に於て南洋にあつて各方面で凡て最も優越な地位に當つてゐたが、今日では即ち事業の壓迫を被り、種々の制限を受け、商人はその資本の全部を利用する事が出来ず、労働者もことごとくその技能を發展する事が出来ず、農民は悉くその勞力を出すことが出来ないで、何もかも只消極的に現状を維持してゐるだけである。事業も亦逆水行舟の状態では、進む事が出来ずして退くの外なく、かの昔から保持してゐたものも靜止の状態となるのは當然である。國家が衰微してゐる爲め、これを保護し自由發展に任せる力が無く、曾つての習慣は性格となり、外交は麻痺し、前年シャムの慘劇の如く（民國二十五年）最近各地の排華も、政府は見えないふりをしてゐるのである。これが實に南洋華僑の没落の主要原因である。

(二) 國內工業の未發達 我國の初期の西洋へ出かけた同胞は、僧侶を除く外は、十人の八九までは商人であつた。唐以後には少なからぬ農工分子が、生活の爲めに鞭打たれて已むを得ず彼地に到つて僑居した。唐の義淨は曾て四ヶ年間スマトラ島に僑居したし、新嘉坡には唐人の墓碑がある。宋、明二代には、遺臣遺民が、政治的壓迫の爲め已むを得ず、彼地へ到つて避難した。（傳へられるところでは、南宋の遺臣陳仲宣、鄧思尙は爪哇に到り、明の桂王は曾て緬甸に亡命

した）しかし矢張り商人が中心であつて、而も土人が歓迎したところの者も亦商人だけだつたのである。

「諸蕃志、蘇利吉圓條にては「蘇吉圓は即ち閩婆の友國なり……商賈を厚遇し、宿泊飲食の費無し」といひ、又同書の「渤泥」の條「三佛齊條」島夷志略文老古條」にも商人好遇の事が記してある。

それによつて見れば、當年の華商の南洋に於ける地位は甚だ優越だつたのである。この種の賣買は必ず市場の利益の三倍であつた。これに依つても支那人が過去に於て南洋の土人の歡迎を受けたのが見られるのであるが、これは決して國家が隆盛だつたからではなく、支那の當年の工業が比較的進歩してゐたからであつて、彼らに支那人の供給を求めたからである。蓋し人類間にあつては、最も國際間の相ひ接するところに、必ず相互に利用する點があつて、始めて永久に維持出来るものであるが、若し一方面ばかりが便宜で他の一方面に缺損となるやうな交情は、久しからずして冷淡となり、消滅するやうになり、甚だしい時は明日の親友は今日の敵と變るからである。

今華僑が南洋土人の信仰と尊敬心を失つたのは、勿論我國の工業が衰落し、その製産品が、土人の需要を充すに足らなくなつたからである。だから、今後若し我國の工業が長足の進歩をする

事が出来、精良な製品を南洋の華僑に送つたならば、即ち過去のあの敬唐愛唐の心理が又再び恢復されるのである。我國の友邦中の工業の發達した國は、旭日が初めて昇るが如き勢ひで南洋に歡迎されてゐるが、我國はこの道に拙劣であるから、到る處で白眼視され、排斥を受けてゐるのである。今の南洋の華僑たちは賣買取引のしやうがないので「座して喰へば大山も空し」とかこつてゐるが、こんな事では日ならず没落するの一途を辿つてゐるのである。

(三) 互助と團結精神の缺乏、明の萬曆以前(一五七五—一六一九)には、支那は南洋方面にあつて、無形の中に於て實に宗主國の地位にゐたのである。それ以後白人の東亞進出が日々に激しくなり、海軍の脅威政策を以て、南洋に植民主義を遂行したので、我國の一貫した束縛政策は、こゝに至つて即ち失敗を告げ、之れに因り華僑の地位も亦即ち第二位に屈居して了つたのである。十九世紀の初葉に及ぶと、白人の南洋的勢力はやうやく鞏固となり、範圍が確定したので、こゝに於て即ち各々その餘力を出して經營に當つたのである。蓋し當時の南洋は未だ草原未開の處女地であつたから、墾殖に従事する爲めには實に大量の労働者を需要したところへ、福建廣州沿岸一帯は、日々に人口過剩を告げて生活に苦んでゐたので、これら一般の農工らは即ち此の千載一遇の機會に乗じて相率ゐて南洋へ向つたのである。こゝに於て南洋華僑は農工を中心とするやうになつた。これは華僑の質的變化であると同時に、その量も亦激増したのである。この

如く人數が甚だ多くなると、分子も複雑となり、之に因つて良莠は不ぞろひとなり、善良な者は固よりよく刻苦工作し、自らの生活を計つたが、悪劣な者は即ち怠惰の習性となり、已に仕事を厭ふやうになつた。但し當地にあつても、誰も自分を知る者がなく非常に寂しいので、一時の生活の壓迫は、つひに悪を作り非を爲し法紀を干犯するやうになつて了つたのである。これは少數中の少數に屬すと雖も、然し群衆中にかうした「害馬」のある事は、即ち外國人に華僑を輕視するの心を起さしめた。又一般の華僑にも見識が未だ廣くなく、腦裏には傳統的思想が充滿し、郷土觀念が甚だ深く、かの漳州幫、泉州幫、福州幫、廣州幫、客家幫、湖州幫、瓊州幫のやうなものを作り、お互ひに境界を守り、分門別戸の状態で、古い秦、越の態度を保たうとし、教育をよく辨じ、實業をよく興し、慈善を亦よく行ふといふやうな事に論なく、凡て各自の幫(同郷の間)で計り、互ひに聯絡を取らず、甚だしきは相互の攻撃であつて、時に目的に達しようと思ふと、つひに手段を選ばずして、當地の政府の勢力を利用して祖國の同胞を壓迫するのである。この種の利己主義の卑劣な根性は、實に外人の支那人を輕視する心理の主要な原因であつて、不幸な事件の甚だ多いのは、凡てこの種の心理から造成されたものである。これに依つても、華僑が没落するのは相互扶助と團結精神の缺乏にある事を知る可きである。

(四) 知識の缺乏 白人種の南洋開發の頭初には、範圍が廣大であつて、労働者の需要も多か

つたから、當時の勞働力は、高價であつて大いに沾つた。が、しばらくすると、「蕃地」「熟地」にことごとく變成され、實業は振興し、原料は豊富となり、この時には熟練工を重んじ、素人勞働者の増加を輕んじたが、しかもこの種類の工作はどうしても相當な技術と訓練が必要であるのに、華僑の多くは支那内地の農夫勞働者であつて、所謂現代の訓練と技術は何も出來ないのであつた。これがまつたく南洋華僑の失業問題の重大な原因である。又個人的家内工業の革命された後、資本主義は商業資本より進んで工業資本となり、再び進んで金融資本となり、その形態は不斷に變化し、その組織は日々に合理に向つた。而も歐米帝國主義に寄生する植民地の華僑は、力量は不足ではあるが、これを歓迎しなければならぬので、全く急に應じて立ち、過度の落伍をまぬがれた。然し事實が吾々に告げるところは、彼らは決してこんな風にはしてゐなく、一切凡て古い方法を墨守し、帳簿なども尙ほ例の「流水式」であつて、新式簿記の利用を肯んじなかつた。雇人も尙ほ「父子公孫、三代同居」であつて、外人に雇はれる事を喜ばず、その任務も多く一つに貫かれてゐないのに、現代の組織法の採用を肯んぜず、責任を主腦者にかづけ、人をしてその才を盡さしめぬ。この固執の下に白人種と競争したのである。猶ほあはれむ可きは世界經濟の恐慌の風潮の爆發の初めなどの人氣に構へ、資本の收縮方法を取らなかつたので、非常な損失を被つた如きがそれである。この時に到つても、已むを得ず「開門大吉」を信じて自ら倒れ、甚

だしきは生活苦の爲め自殺するに至つた。これに依つても、南洋の華僑の没落が實に知識の缺乏に依る事を知る可きである。之を要するに今日保僑救僑を欲するならば、須らく根本方法を求め、軍艦を派遣して慰問するとか、華僑の部落を樂しませる位の事ではダメである。即ち幼稚な工業を振興させ、國の内外にある者に論なく是れを救はなければならぬ。工業が發達し、生産が豊富となり、廉價で物品がよくなるならば、一個の經濟團體の中の四億の團員は、國の内外を論ぜず皆な利潤にひとしく沾ふことが出来るのである。

この華僑振興論の精神は、少くとも舊國民政府（蔣政權）の政策と一致するものである。蔣政權は、華僑の財産と地位とを、極力利用して、（悪用に比し）經濟的には日貨排斥を圖り、政治的には、國費の後援とデマに躍らせて來た。又、華僑も、それにつれて充分踊つて來た。しかも、その亂舞は、蔣の太鼓に拍子を合はせて踊つたのみならず、支那事變の援蔣國、三國同盟の敵性國等の惡魔的な笛にもつれて踊つたのである。

しかし、いかなる妨害にもかゝはらず、日本の戰勝が確實となる事を知り、重慶の没落を識ると、華僑は大分動搖し出して來た。そこへ、汪精衛を主席とする國府が、健全な發育を遂げつゝ、

ある現状を見たので、漸次冷静にかへりつゝある。

それにつけても、華僑七百萬の存在は、南洋に取つて、大きな問題である。それは、南洋や支那本國の問題ばかりでなく、華僑自身の進退の問題でもある。

#### 四 華僑への對策

常識的に所謂華僑の意義については前述した。

こゝでは、華僑の特質を取上げて、その日本的對策を考究して見ようと思ふ。

由來華僑は、同族同郷の者が相互に扶助し合つて、一つの特殊な華僑社會を作り上げたものである。それも科學的に「組織」したといふよりは、自然に「組み立て」られた方が多いと思ふ。表面から看れば、その中層階級に根を張り、それを基礎としてゐる華僑の組み立ては、力強くもあり強固のやうでもあるが、よく觀察すると、上と下の階級の間を結合する寄生的存在にしか過ぎぬのである。

従つて、經濟的には巨大な力量を持つてゐても、その力量が政治的にまだ進まぬところに、華僑的特質と弱點があるのである。

従つて、その働いてゐる植民地の領有國と、土着民の民族的經濟的的政治的壓迫と對抗しなければ

ばならない立場に、何時も置かれてゐるのである。

彼らは、相當に同化力は強いのであるが、然し、どうしても僑居する土地民族それ自らとは成り切れない。

これも、特質の一つである。

かるが故に、祖國の爲政者側から觀れば、祖國祖先を忘れた不屈者に見えるやうな場合でも、實は、祖國を忘れず、決して故郷を忘れないのである。

それが證據には、華僑の居るところ支那街在らざる無しであつて、この一事を以てしても、民族精神と祖國を胸底から捨て去らぬ所以である。

なればこそ、祖國を想ひ、故郷を忘れざればこそ、祖國の革命家孫文のパトロンとなり、祖國の政治家の闇の策にをどり、蔣介石に獻金し、抗日に活躍したのではあるまいか。

こゝにも、特質の一つがある。

少なくとも、濟南事變に獻金し、上海事變にルンペン軍十九路を助け、支那事變に獻金網を張り、南洋の凡ゆる場所に於て日本商品排斥を行つた華僑は、我國としては等閑に附せられぬ問題であるが、だが、根が經濟の徒であるだけに、儲かる儲からぬに就いての見透しは、實に利くのである。つまりは、經濟的成功だけを熱望してゐるのであつて、別に政治的野望までは、多くの



者は持たないのである。

こゝにも、特質の一つがあらう。

自分自身が、経済的には南洋の旦那であつても、(寄生蟲にも五分の魂で、さう信するのは無理もないし、第一その実績が物をいつてゐる) 政治的には、常に壓迫されてゐるので、何も祖國愛とまでは行かぬまでも(そこには彼ら一流の面子があるが) 祖國の政治家に加擔するのである。

この點は、祖國の政治家の歐米依存と、微妙な關係に立つてゐる。といふのは、華僑の教育は祖國の政權にならつて、頗る排日抗日的である。こゝにも、白人の領土で働く者の卑屈さがあると思はれる。大體に於て、華僑は無智な者が多いから、直ぐ煽動に乗るのである。

この見透しのつかぬ、祖國愛は、大きな目から見ると、可成り悲惨なものといはなければならぬ。

政治力なき経済力が、どんなものであるかを知らない彼らは、氣の毒である。

これも、特質の一つである。

具體的には、日貨排斥の問題がある。

これは、特質といふよりも、常例の自縛自縛行爲の一つであるが、たつた一つ特質と言はれるものが、今次事變中にある。

一寸、爰で、華僑の日貨排斥の現實問題について、参考書をひもといて見たい。

「貿易を通じての日貨の進出は、南洋土人の經濟生活を向上させる有力なる根幹でもある。だが、南洋諸國は現實に於て歐米諸國の支配下にあり、日貨の進出及びそれに伴ふ我國人の南進は容易でない。現在、南洋に於て活躍せる日本人は僅か四萬人であり(註——昭和十四年)、其多くは各種栽培事業に従事し、商業方面に活躍する者は五千人に過ぎない。従つて、我國商品を南洋に於て自ら賣却する者は少い。其大部分を南洋の經濟的覇者と云はれる華僑に委ねざるを得ない。例へば、蘭印に對する我商品輸出は最近一億五千萬圓に達し、我國人の進出も相當著しかつたが、此輸出商品中我國人の自ら土人に賣却したる額は約六百萬圓であつたと云ふ。我國商品の販賣も其大部分は華僑の配給網によらなければ、可能ではないのである。此處に貿易上に於ける華僑經濟との關係が生ずる。一方、華僑自らにとつても、日本商品は専ら土人乃至華僑の日常生活品が主要部分であり、且つ良品廉價であるから、他の諸國の商品取扱よりも、より多くの利益を獲て居る筈である。従つて、此點から云ふならば、我國經濟と華僑經濟とは密接に提携して行ける譯けである。然るに、事實は逆で、華僑は支那本國政府の政策に呼應して、屢々日貨排斥を行つて我南洋貿易業者に苦杯を嘗めさせ、我南洋貿易を阻害する者は華僑なりと云ふ感を與へて居る。中略)次に、我國の南洋への經濟的進出の他の形態は、企業投資

である。現在我國は護謨、鐵、麻等の諸企業を經營し、其投資も決して少くはない。然るに此等企業の經營に當つて、其労働者は多くは華僑である。南洋に於て最も有能な労働者たる華僑の動向は、我國の南洋に於ける企業に影響を持つてゐる。(中略)然し乍ら、企業上に於ける華僑との關係は、貿易上に於けるが如き程の重大なるものではない。それは我國の企業方面への進出は未だ限られたる範囲内にあつて小であり、且つ機に應じて華僑に代つて印度人苦力、爪哇苦力或は山東苦力と代替が出来得るからである。最後に、日支關係は常に南洋に影響し、亦同時に華僑の動向が日支關係に重大影響を齎すことは忘れてはならない。日支の關係は結局東亞の關係であり、其間に於ける華僑の役割を輕視してはならない。現在唱へられる東亞經濟の結成に當つて、華僑の参加こそ、問題を解決せしめる大きなポイントである。」

「支那が國民政府によつて支配さるゝに至つてから、華僑は常に本國政府に呼應して大なり小なり日貨排斥を行つて來た。而して其有効性も、彼等が事實上南洋經濟を支配して居る以上、相當な打撃を與へて來た。然し乍ら、全體的に見れば、華僑が日貨排斥をなす事は彼等に最も多くの利益を與ふるものを拒絶することとなり、彼等の蒙る損失も決して少なくはなかつた。それにも拘はらず何故日貨排斥を行ふのであらうか？ その理由は種々なければならぬ。次に其主なものを挙げよう。」

「一、華僑内に於ける國民意識の濃化——(中略)國民政府の華僑に對する國民意識の鼓吹は、世界に於ける民族解放自決運動の高潮に乗つて益々拍車が加へられた。然し乍ら、華僑在住國政府にとつては、華僑のかゝる行動は土人統治上に重大影響を齎すのみならず、華僑の有する經濟力を政治方面に向けしむる事となり、該國の政治經濟方面乃至は社會上非常な混亂を招來する恐れがある。それ故華僑の國民意識高揚につれて、華僑に對する華僑在住國政府の壓迫も強化せざるを得なかつた。それは亦逆に華僑の國民意識を強める結果となつた。かくて、南洋に於て從來支那本國に對し割合に冷淡であつた峇々も、その中に巻き込んでしまつた。國民政府は近代的國家建設の爲に、先づ打倒帝國主義を標榜した。だがそれは何時の間にか日本と云ふ特定の帝國を打倒することに變つた。(註——これは蔣政權の歐米依存と、共產黨の暗躍に依るものである)最近十年間に於ける支那國民政府は抗日乃至排日即ち建國と云ふ誤つた政策に終止一貫した。従つて華僑の國民意識の高揚は即ち抗日乃至排日の高揚であるとなつたことに不思議はない。事實、國民政府はラヂオに新聞雜誌に(註——恰も、ラヂオ、通信社、新聞社、映畫等の宣傳機關を、世界中に張り廻してゐるユダヤ財閥の如く。國民政府は、歐米ユダヤ財閥と結合することに依り、今次事變のデマ、抗日意識の煽動は、凡てユダヤ機關を通じてなしたのである)或は華僑教育機關を通じて、多くのデマと共に此事を宣傳し來つたのである。——二、日貨排斥によつて利

益を受くる者の強要乃至援助。華僑は多く日貨を取扱つて居るのであるから、利益多き日貨を排斥することは、實際上から云つて躊躇せざるを得ない。だが、一面に於て愛國者たる美名の下に日貨排斥を強要する華僑も存在する。即ち日貨と競争的立場にある華僑製造業者及び日貨を全然取扱ふ必要な華僑の排日貨運動であり、更に此日貨排斥を援助するものに外商がある。(中略)三、日貨排斥テロ團の強要。日貨排斥を行ふ上に重要役割をする華僑團體には二種類ある。一は所謂登録されたる團體で中華總商會を中心とするものである。此等の團體は華商の總意を代表するものであるから、日貨排斥に當つては、割合に微温的態度を採つて居り今次の支那事變に當つても主として獻金及救國公債の方に力を注いで居る。然し、登録された此等團體中にも、非常に抗日的態度の濃厚なものもある。例へば、昨年(註——昭和十三年?)九月「植民地の安寧秩序を破壊する目的の爲に行動した」との理由によつて解散された新嘉坡の青年樂心社の如きものである。二は日貨排斥テロ團體であつて多くは非合法團體である。此等の團體には種々あり、破落に、無頼漢を主體とするもの、共產黨分子を主體とするもの(註——井東憲著「支那の秘密」中「便衣隊亂舞史」テロ團と娘子軍」に、彼等の組織と活動方法が具體的に書いてある)、國民政府の宣傳員を主體とするもの、或は以上の混合よりなるもの等がある。例へば、今事變に於ける馬來の非合法抗日團體は主なもの十團體其他無數の小團體あり、其總帥は華僑

抗敵後援會であり、その他、中華民族解放先鋒隊、青年救國鋤奸團の如きものである。日貨排斥テロ團の横行は、(註——その費用は、國民政府、共產黨から出るのは勿論、日貨排斥に依り、有利な立場に立つ外商からも出るのである。又、その横行を、援助する外商もある)華僑の日貨排斥を強要するに最も有効である。彼等の行動は直接的であり、且つ日貨を取扱ふ華商乃至は日貨を購入する華僑及土人は屢々生命の危険に曝される以上、日貨排斥に参加せざるを得ない。彼等は警告、コールタール塗、首斬り、慘殺(註——事實は最といろくあるが、こゝには代表的なものを列記したものであらう。この慘虐行爲に、出資する外商に、ユダヤ人の多いことは、注目に價する。)の順序を以つて、日貨を取扱ふ華商に對して居るのである。彼等は監察隊を作り、市中を横行し排日貨の徹底的調査と基金の強制的募集を行ふ。現在新嘉坡だけでも、この非合法的抗日團體に加盟せる華僑は一萬人と報ぜられてゐる。(中略)四、南支と華僑との關係から——華僑と其郷土たる福建廣東地方との關係の密接なることは、前章に於て述べた通りである。福建廣東地方に平和と善政とが齎せられるか否かは華僑の動向を非常に支配する。若し、華僑にして排日貨運動に参加しない爲に、彼等の郷土に於ける父母妻子或は縁者が迫害を蒙ることありとすれば、進んで排日貨に参加するであらう。皇軍によつて厦門廣東が陥落するや、華南の排日貨運動は非常な勢を以て盛んとなつた。然るに、其後同地方は皇軍によつて平和と善政が齎らさ

れたのが漸次判明するや、排日貨運動も漸次衰へるに至つた。此點は爪哇華僑の動向と厦門陥落の關係に於て適例を見る。今後南支に於ける我工作は、華僑の動向に非常なる影響を與へるであらう事は、特に注意すべきである。」(福田省三氏著「華僑經濟論」より)

この日貨排斥の問題も、華僑の特質の一つである。それと共に、この問題は、經濟問題のみならず、政治問題と關聯してゐるところに、重大性がある。

中華から見れば、南洋華僑には、國籍問題とか、僑務問題とか、華僑同國投資策とか、種々特殊な問題があるが、大陸政策の實行家東亞共榮圈の指導者としての日本は、これら華僑を最も正しいアジア經濟團たらしむるの使命がある。

華僑は、南洋の經濟的一大勢力である上に、飽まで祖國を愛する中華民族である。南洋に於て、土人と結婚し、第二世を生ませても、祖國や故郷を忘れない。

インドと中華の民族運動の動向が、全アジアの將來に、決定的影響を與へることと、同じやうな意味に於て、南洋華僑の民族的覺醒は、大アジアの將來に、絶大な影響を與へる。

若し、華僑が、眞にアジア民族として覺醒し、その自覺と責任の下に、南洋民族と共に活動したならば、南洋に於ける白人の政治的經濟的勢力は、たちまち危機と衰運にさらされる。

少くとも、南洋華僑が、今次事變の日本の眞意を正當に理解することが出来るならば、事變の

處理が早速につくのみならず、彼らの平和と幸福は立どころに來るのである。

第一次世界大戰が、アジア民族の空前の興起發奮を齎したことは、その後の事態が證明して餘りあるところであるが、今次事變を通じての日本の大陸政策と、アジア諸民族殊に中華民族とは、深刻な因果關係の中に置かれてゐる。

又、歐亞から全世界を動搖させつゝある第二次世界大戰が、アジア民族をより興隆し驟起せしめるは、想像どころか已に現實の問題である。

この時期に際し、華僑は、蔣政權を援助する事に依つて、歐米に依存し、民族精神をして思はぬ赤色に染む可きではなく、本來のアジア民族精神、眞の愛國者にかへる可きである。

それにつけても、私は、この歴史上曾て見ざるの民族的革命期に際し、日本の大陸政策、引いては南洋政策に多くの反省を望むと共に、非常な希望をかける者である。

中華民族(こゝでは華僑を問題としてゐるのであるが)の今日までの不斷の熱望は、白人帝國主義支配よりの解放と、それに依る民族的革命の斷行と、それを中心とする自民族の向上發展であつた筈である。

日本の大陸政策は、こゝに着眼し、よき指導者とならなければならぬのである。(この點に ついては「南洋民族論」の中で述べた)

しかし、現實問題としての華僑對策は、洵に困難多き事業である。

この華僑對策の問題は、事變の好適な善處と、關聯してゐる。事變の解決は、蔣政權と妥協のつかぬ今日、しかも英米の重慶援助の強化の事態の下に在つては、蔣政權の完全な粉碎より他にない。

蔣政權が完全に打倒され、英米が國內及び大戦事情の中で、中華から後退せぬ限り、なか／＼華僑の援蔣抗日の夢は醒めないであらう。

蔣政權の根絶が、事變處理の絶對の方策であつて、これに依つて、華僑對策も極る譯けであるが、しかし、一面に於ては、華僑問題の解決が事變を處理するとも云ひ得られるのである。

だから、日本としては南京國民政府を援助し事變の急速なる處理を圖ると同様に、蔣政權根絶の爲め、軍隊を殘餘の重慶側地域に進める必要がある。

これを華僑問題に就いて言ふならば、華僑の汪精衛の支援を擴大強化せしめることと、華僑の郷土の多い福建、廣東の所謂華僑區域を征略しなければならぬ。

若しも、福建、廣東兩省を、完全に我軍の制壓下に置くならば、南洋華僑の大半は、非常に動搖し、日本の實力と眞意を知り、南京政府を積極的に支援すると思ふ。

蔣政權は、事變頭初から、華僑の財力と抗日力に目をつけ、巧みに煽動し利用して來た。事變

以來、蔣政權が華僑から集めた獻金事變公債は三億に上つてゐる。そのうちシンガポールが、一億三千万元、蘭印が四千万元といはれてゐる。(重慶側報告)

南洋華僑の抗日の中心は、新嘉坡、比律賓である。佛印、泰國、蘭印、緬甸等には國民黨部や華僑總會や華僑救護會などが設置せられ、援蔣資金の調達や抗日に活躍してゐた。

だが、最近重慶政權の没落を知り、日本の南方政策の正しい進展を認識したところへ、汪政權の確立と發展を見たので、大分ぐらつき出した華僑があると言はれる。

即ち、タイ國、佛印、蘭印、英領馬來、フィリッピン、(こゝでは米國政府が、蔣政權と聯絡を取つて活躍してゐるから、今後の形勢は分らぬ)緬甸(こゝのビルマ人一千万は親目的であつて、従つて反華僑的であるが、蔣政權の手が伸び易く、且つ蔣政權はこゝの華僑の獲得に躍起となつてゐる)などの華僑は、汪政權支援に變りつゝあり、それ程でないまでも援蔣が消極的となつたと言はれる。

然し、いつも形勢は安心出來ぬものがあり、重慶政權の華僑利用政策は、英米の勢力を背景にしたのみ、しきりと暗躍をつゞけてゐる。

勿論汪精衛主席も、僑務に深き關心を寄せ、

「華僑をして和平反共建國の大義を明瞭ならしめるやうに注意し、宣傳、教育、社會運動各方

面に於て何れも相當なる努力を續けて居る」(昭和十六年三月三十日、南京還都一周年記念式典にて)

と述べてゐる。

けれ共、何と云つても、日本の援助がなければ、新國府の華僑政策は成功しないのであるから、日本は華僑にこそつて汪政權を支援させる可く、努力す可きである。

華僑對策について、井出季和太氏は興味ある「南洋華僑對策論」を發表してをられる。その概略を紹介させて貰ふ。

「(イ) 華僑産業の振興を計ること——南洋華僑は一九二九年以降世界的恐慌の打撃を受け、多いときは百萬近くの失業者を出し、數年間に亘り、歸國者は出國者數を年々著しく超過したのであるが、他方又移住地政府のブロック經濟の強化を目的とする營業取締り、入國制限その他政治的壓迫又は同化政策の實行、並に土人の經濟的自覺若くは支那商人の自殺的排日運動等に依つて華僑經濟は正に一落千丈の窮狀に陥つたのである。南洋各地に於ける資源の開發、産業の發達に對しては華僑はパイオニアとして、その功績の頗る大なるものあるを認めねばならぬのであるが、近年は新たに勃興した白人の現代的事業と對立することを得ないので、不振の域を辿つてゐるのである。故に今後は更に日支共同事業の下に華僑資金の投下を促進すると

共に、我が國より技術を供給し、經營の指導をなす等、以て白人の事業に拮抗せしむべきである。

(ロ) 商業上に於ける華僑の使命を達成せしめること——(中略)

(ハ) 華僑金融機關の充實を計ること(中略)

(ニ) 南支南洋の交通網を擴充すること——華僑對策上最も重點を置くべきは、南支南洋の航路には英蘭を始め南洋に大植民地を有する國の汽船が勢力を占めて居たが、就中香港中心の上海より山東まで南支航路に於て事變前英國系汽船は五十隻以上に達して居たに對し、邦船は内地、支那、臺灣の各線を合するも十隻足らず、昨年十月末現在も南支沿岸の日本船は四隻に止るが英船は十八隻に上る。而かも排日貨運動の起る毎に支那人乗客は激減し、南洋往來の華僑の取扱は、英蘭等外國汽船の獨占到歸し、之に依つて直接間接に利する所甚大なるものがあつた。乃ち今後は南支、南洋を連絡する華僑勢力の汽船會社を創立すると共に我が南支、南洋航路の擴張に一層努力すべきである。尙ほ航空路の擴張は廣大なる區域に散在する南洋華僑の經濟文化の發達に資する爲には不可缺の施設である。

(ホ) 南支、南洋の築港施設を完備すること——

(ヘ) 華僑の參政權を強化すること——(中略)或は民國二十年の國民大會開催に當つては、何

れも新嘉坡その他より有力華僑が参加して居り、或は地方問題に就ても民國二十二年福建省建設委員會成立當時には、新嘉坡その他より有力華僑参加した如くであるが、今後はかかる臨時委員の参加の外に親日中央政府又は福建、廣東兩省政府には各出身地華僑の實力者及び徳望を有する者を首脳部に任命することは、華僑事務進展上最も機宜を得た工作である。

(ト) 僑務機關を擴大すること——(中略)新政權の華僑對策は右華僑委員會の機構を擴大し、親日體制下に僑務の刷新を計り實効を収むべきである。

(チ) 抗日的文化施設の建替へを徹底せしむべきこと——現在の華僑文化施設中最も抗日工作を助成強化して居るものは、華僑學校、新聞、團體等の活動である。南洋に於ける華僑學校は専ら三民主義を教育方針とし、居住地政府の同化政策の趣旨に反するので取締り彈壓に遭つて居るが、殊に抗日思想の培養機關の役目をするので今後は根本的に之が建替へを爲すべきものである。南洋各地の漢字紙の大部分は、又三民主義を鼓吹し、反日論を強調して居るのである。例へば泰國の國民日報、中華日報、華僑日報等は抗日宣傳が多かつたので、何れも一九三九年政府より發行停止を命ぜられた。英領馬來では新嘉坡の南洋商報(陳嘉庚創刊部數約一萬八千)吳洲日報(胡文虎創刊部數約一萬五千)——(註)陳、胡共に抗日の巨頭。しかし互ひに商賣敵同士)の二大新聞を始めとし、星中日報、彼南の光華日報、コランボの馬華日報等、蘭

領印度ではバタビアの新報、天聲日報、スラバヤの大公商報等は何れも抗日論調を有し、佛領印度支那の華僑日報、安南日報、公論報等、比律賓の新閩日報、華僑商報、新中國報、公理報等は又各反日的煽動に努めて居る。此等排日紙は主に現在蔣系又は國民黨に屬し、重慶政府を支持し、虚偽の宣傳を爲し、華僑社會の人心を廣く支配して居るから、將來之が廢刊又は論調の轉換を策すべきである。

これらの議論は、當然日本の南方政策上、第一に解決す可き問題であると思ふ。

南洋の新聞の抗日宣傳に關聯して、ユダヤ財閥の、通信、新聞に多き、援蔣的抗日宣傳も、是非取上げて究明しなければならぬ。如何に、國籍や姓名をカモフラージュしても、世界の一流の新聞、通信、映畫會社は凡てユダヤの資本下にあり、ユダヤイズムの宣傳を事としてゐる。ソ聯英、米、佛等の新聞、通信で、ユダヤ資本の息のかゝらぬものが一つでもあるであらうか？

現代のドイツを除いて、何れの國においても、公衆に對するニュースの提供は、悉くユダヤ人の左右するところであつて、ユダヤ人の利益に些少でも反するものは、紙上に現はれることを許されない。新聞取次販賣店さへ往々にしてユダヤ人の統制にあり、少くとも今日では、よし統制不完全な新聞が歪曲されぬ事實を讀者に提供する意圖を有してゐても、大廣告主の權力は優にポイコットによつてこれを粉砕することができるのだ。

例へば、米國のヘンリー・フォードは、その著「國際ユダヤ人」に於て次の如く論じてゐる。  
 「一八九〇年頃のニューヨーク市の新聞は未だユダヤ人の干渉を全く受けてゐなかつた。然るに今日では事實上ユダヤ人の支配を受けないニューヨークの新聞は殆どないであらう。これは諸種のユダヤ的惡事が行はれ、また行ふに便利であることを物語るものである。」と。（「國際秘密力の研究」第二冊第四冊より）

（新聞、通信のユダヤ的陰謀については、井東憲著「ユダヤ問題の研究」に詳述してある）  
 こゝに敢て、ユダヤ財閥の英米ソ聯佛に於ける實力について記述したのは、當然南洋の抗日新聞との聯絡性を想つたからである。支那事變の南洋に於ける抗日宣傳の凡ては、ユダヤ系の通信社と新聞とラチオ、映畫の仕事であつたのである。（井東憲著「變り行く支那」参照）  
 こゝにも、華僑對策についての、留意すべき問題の一つがある。

要するに、南洋華僑對策は、今次事變の處理の促進完成と、深刻な關係にある。

三國同盟の締結、我軍の佛印進駐、泰佛印調停の協結、我軍の重慶壓迫の強化、世界大戰の獨伊側への有利、日・佛印共同防衛の宣言と實行等々は、そのまゝに南洋華僑に響いてゐる。

こゝに、日本の積極的に取る可き道があると信ずる。華僑を正しき中華人とし、アジア人として正しく生かし、發展させるところに、本統の華僑對策の根本義があると思ふ。

## 第九章 支那南洋民族の對日感情に就て

### 一 民族的な感激

日清戰爭の日本の勝利が、支那邊疆民族南洋民族に及ぼした影響は、回教徒を中心に、可成り大きかつた。

日清戰爭の、日本の驚異的捷利に、最も感動したのは、支那西域のイスラム教徒であつた。こゝには、甘肅を中心に、漢民族の回教徒が居り、新疆の天山北路を中心に、トルコ系の回教徒がゐる。

トルコ系は、あの戰爭には、餘り興味がなかつた様子であるが、漢回は、非常な激動を受けた。漢回で、日清戰爭に將軍として参加したのは、馬一族の馬玉鬼、馬福祥、馬聯甲、馬良であり、外交的に参加したのは、馬維麟、楊晨、吳疏麟、馬龍標などであつた。彼らの中には、後に頗る親日的態度を示したものがあつた。あの當時から、日本が、西域回教徒の勢力に目をつけてゐたなら、非常な政治的變化を、支那に與へる事が出來たであらうと思ふ。



日露戦争は、支那の邊疆民族南洋民族に、深大な影響を與へた。彼らは、大帝國ロシアを撃破したる小國日本に對して、心からなる拍手を送り、日本の捷利を、自分達アジア民族の捷利として喜んだのである。我がアジア民族中にも、本當に強力な者がゐるぞ、といふ感激は、日本に敬意を表すると共に、アジア民族としての自信を深めたのであつた。

その實證は、文獻的に澤山残されてゐるが、印度に於て英國のスパイとして多年活躍してゐたエフ・シー・アンドリュウスが、次のやうな驚嘆の辭を本國に寄せてゐる事が、その影響の甚大さを物語つてゐる。

「日露戦争はアジアの諸民族をして、實に感動して彼らの將來を待望せしめた。その興奮の波は支那の邊疆のみならず、北印度を越えて、近東へまで突進した。こゝの非常な奥地の住民でさへ誰も一緒になると日本の勝利の話をして喜んだ。」

又、この問題に對し、頗る神經過敏になつてゐた（一面では、ロシアを抑へる爲め、日本にユダヤ資本を投資してゐたが）英國は、西アジアに永年住んでゐた領事等に、アジアの邊疆を歩かせたが、その何處にも日本の勝利に對するアジア民族的な感激がみなぎり、その刺戟は、サラセンや金の文化以來、ずつと歐米に壓迫されつゞけて來たアジア民族の情夢を打破しアジア民族の強さに對し、確信を得たのであつた。この感動の大波は、アフリカにまで波及した。

しかし、阿片戦争以來、急速に支那に食ひついた非アジア人種の勢力は、手を變へ品を替へて近東支那を中心にアジア諸民族の屈伏に魔手を伸ばした。

## 二 歐米人の懐柔工作

やがて印度を足場に、支那から安南を奪ひ、ビルマを取り、西北を懐柔した彼らは、支那南洋を、經濟的に思想的に文化的に、自己の藥籠中のものとして了つた。その重大な意味は、極力日本を牽制したことである。

彼らは、あらゆる手段と、甘餌とを以て、アジア民族殊に支那人の、對日感情の悪化をはかつた。

今次事變も、つまりはその爲めに起つたのであるが、歐米依存派、親ソ派の、邊疆民族懐柔策は、實によく計畫され、陰謀されたものである。

たとへば醜陋劉の「中國近時外交史」などを見ても、帝國主義壓迫中國史となつてゐるが、歐米勢力に對する認識不足や錯誤の點が敢て多く、殊に日本に對しては非常な間違ひをしてゐる。それは即ち、歐米的親ソ的な見方を、無理にしてゐるからである。

こゝに支那の不幸が生れて來てゐるのであるが、實に氣の毒なのは、デマに躍らされて來た邊

疆民族である。

私がこの間、譯した本に「西藏風俗史」があるが、これは又甚だ變態的な本である。西藏の風俗は、よく分るが、その書いてゐる態度が、全然英國の植民地とでも言つた調子なのである。それもその筈であつて、西藏婦人を妻としてゐるロイス・キングと言ふロンドン生れの支那邊疆の總領事が、妻の話を通じて英國に好都合に變へて書いたものだからである。

それはやむを得ないと我慢しても、世界で一番尊敬すべきところはロンドンであつて、日本など殆ど問題としてゐない。

陳安仁の「中國近世文化史」などは、比較的日本人に對して公平であるが、しかし最近の出版なのに係らず、日本の眞の實力に對しては、矢張り認識を缺いてゐる點が多い。況や、無智な者の多い邊疆民族は、日本の本當の姿を、全然知らなくされて了つてゐる。日露戰爭當時の、彼らの感激は、實に巧妙に、失はされて了つてゐるのである。

だから、邊疆民族の對日感情を知らうとする事は、洵に困難なのである。

### 三 刻下の文化對策

暗示的に言ふならば、外蒙、新疆、青海、綏遠、寧夏、陝西、四川、雲南等々と言つたところ

には、雲南を別として日本人の足跡が少ないから、何時の間にか、親ソ、親歐米と形を變へられて、日本を甚だ知らない。雲南も、元の親日的な姿から、親英的となつて了つた。

歐米は、宣教師とジャーナリストを宣傳がよりとして、支那邊疆の到るところに送り、ソ聯は赤化思想を武器として、凡ゆる方面に潜入してゐるが、日本人は、僅かな特別の人々以外は入つて行つてゐない。對日感情に誤りのあるのは無理からぬことである。文士やジャーナリスト達の中の、勇敢な人を、もつと積極的に、この方面へ送り、文に口に日本そのものを、深く理解させる必要があると思ふ。全然支那語を知らない者を、たゞジャーナリズムの上で有名だといふので手近かな所をまご／＼歩かせたところで何にもならない。

私は、支那の、あの宣撫にむつかしい邊疆へ、機會ある毎に、筆の立つ勇士を送らなければならぬと思ふ者である。

支那邊疆の旅行記や研究で、有名な著述は、大抵歐米人の手で書かれてゐる事を、心から残念に思ふ者である。

私はこの小文を書く爲め、歐米人の手に成つた有名な支那の研究書を読み返して見たが、クレンシーの「支那風土記」にしる、ウキットフォードの「支那研究報告」にしる近世のマルコ・ポーロといはれてゐるユツクの「支那邊疆旅行記」にしる凡て、碧眼で、期するところあつて見

て来たものばかりである。

この中で、興味のあるのは、ユツクの旅行記であるが、殊に注視しなければならないのは、ユツクが、フランスのラザリスト派の宣教師である事と、彼の歩いたところが、河套、甘肅、西藏、四川、湖北、江西、廣東である事である。ユツクは、三ヶ年の間、所謂危険を犯して、邊疆旅行を試みたのであるが、私は彼が自分の足跡へ、何を残して来たかを思ふの時、日本の立遅れを思ふのである。

一時、パアル・バック女史の「大地」が、支那の真相をでも書いたかのやうに評判になつたがあの長篇の最後はつまるところ歐米讚美に終つてゐる。換言すれば、全然日本の存在を無視した小説である事である。アメリカ人の彼女の、本當のテーマを知らずして、驚嘆した人々は、凡そ新體制に添はぬと言はなければならぬ。これと同じやうに日本人でも、支那の觀方に、甚だ多くの錯覺をしてゐる者がある。

就中、邊疆民族の對日感情などに至つては、その専門家でさへ、見すとしてゐるところが多い。此の重大な問題をゆるがせにしては、支那、そしてアジアの問題の解決は、非常に困難なのである。

#### 四 日本の眞價宣揚

私の知人が、最近支那の邊疆から歸つて來、病に斃れた。

彼は、終始一貫して、日本の支那邊疆政策の積極的ならん事を熱望してゐた。その意味するところは「日本を、日本人の手で、はつきりと理解させる」事にあつた。

日露戦争の時、英國をあつと言はせる程、日本のよさと實力に、驚嘆したことのある、邊疆の人々である。話して、分らぬ筈がないのである。眞の興亞は、かういふ點に、着目して掛らなければ、歐米ソ聯のデマの横行の前に、敗北して了ふのである。

變に人の著作ばかりを引用するやうであるが、衡陽謝彬の「雲南遊記」を一讀して見ても、親日雲南のことは、何にも書いてない。由來、雲南人は、日本の産物が好きで、従つて日本人が好きな筈だつたのだからして、少しはこの問題に觸れてゐなければならぬ筈である。然るに、それが出て來ないのは、日本の經濟力を追出した元のフランス勢力、そして現在のイギリス勢力、に眩惑されて書いてゐるからである。

これを日本人が書いたならば、どうであらうか？ そして、そのアジア及び世界に對する影響はどうであらうか？ 私には、雲南へ、たゞ山嶽を見たり、鳩鳴を食べに行つたり、消極的に軍

関と握手に出かけた日本人の気が知れないのである。もつと積極的に、雲南人の對日感情を善導すべきではなからうか。

顧頡剛、史念海著の「中國疆域沿革史」は支那の邊疆の變遷を識る上に、可成り役立つ著書であるが、その終りの方に「鴉片戦後の疆土の喪失」「民國成立後の疆域區劃及び制度の改革」といふ二章がある。

注視しなければならないのは、後章であつて、一寸讀むと、單に國民政府の政策上、改革したやうであるが、その順序、變改地域の情勢、歐米イズム、ソ聯との深い聯絡に思ひを致すと、凡てが非アジア的、對日的に出來上つてゐるのを見るのである。

今日にして思へば、その全部が、ソ聯ルート、英米ルート、對日ルートだつたのである。殊に邊疆は、回教徒の利用と、赤化及び歐米依存イズム——従つて反日イズム——の、交通路だつたのである。

しかし、吾々は、決して悲觀することはない。

日本の眞意が、よく呑込めれば、いつでもアジア人的な血を沸かす、支那邊疆人なのである。内蒙が、その良い例であつて、日本の眞意が分りはじめれば、立どころに分る民族ばかりなのである。

支那邊疆の對日感情は、未だ、よいとか悪いとかいふ以前ではあるまいか？ それだけに、日本の眞の姿を、はつきり知らせなければならぬ時ではあるまいか。

「禹貢」(支那の民族、風土研究雜誌)などを讀むと、支那邊疆南洋の民俗は、歐米人に怖れ従つてゐるが——多くは經濟的理由で——本當の民族的感情としては、日本の存在を知つてゐる者は好意を寄せてゐる様子である。

即ち、語つてやれば、誰よりも早く眞意の呑み込める人達なのである。

この點いつも、日本の當局に、非常に望むところの多い者である。

興亞の爲に——。

## 第十章 南洋と大日本の使命

### 一 アジア民族の覺醒

東亞共榮圈の指導的地位といふ日本の現實的立場は、アジア諸民族に取つて、生命的な重大問題である。

この日本の指導的地位なるものは、日本に取つて一つの運命的なものであるだけに、その深刻さと廣大さと、眞剣さに於て、充分に確實なものでなければならぬ。

我が大日本帝國は、かの日露戦争の勝利に於て、アジア民族のホープであり、異常な感激の中心であつた。その偉大な新興的力量は、アジア民族中の優秀民族たる大和民族の傳統的な力を、総合的積極的に猛射したところに現出されたものであるが、この力量を現實的に培つたものは、明治維新のあの純理と眞摯と雄輝と果敢な革新力であつた。

日本は、この革新力を以て、國內を改革するに當つて、歐洲文化を取入れた。その間には、生かちりがあり、行過ぎがあり、誤解があつたが、然しよくそれを咀嚼し、良否を分けて、國力發

展の基礎を作つた。この時、本來のアジア民族の不向きなもの、多くを、あわてて取入れたが、これは民族の鞏固な血の流れが、年月と共に清めつゝある。

兎に角、この劃期的な力量を示し、アジア諸民族の景仰を受け、日の出の光輝を放つた事は、アジアに取つて、歴史的出來事であつた。曾て歐洲を文化的に席卷し、歐洲文化の種を卸ろしてやつたサラセンの文化及び、東南のアジア民族に深大な影響を及ぼした古代中世の支那文化も、アジア民族の歴史的光輝であるが、明治維新を通じての日本の新興的威力の發揚、就中、日露戦争の勝利は、政治、文化、經濟、軍事等々を打つて一丸としてのアジア民族の解放的勝利であつて、實に古今未曾有の歴史的光輝であつた。

故に、東方の王道の國日本の國を賭し、アジア民族の運命を賭けての日露戦争の勝利は、數世紀の間萎靡として振はざるアジア諸國を、獅子の睡りから活然として目覺ましめた。第一次歐洲大戰に於てアジア民族諸國が、歐米の羈絆から猛然と脱し、民族解放の實を擧げ得たのも、已にこの時永き惰眠から床を蹴つてゐたからである。

今次支那事變を中心とし、混迷たる歐洲の戰雲を目前の大火として、日本がアジア民族の盟主的地位に立つたのは、決して偶然ではないのである。

## 二 アジアの盟主日本

日本は今や、アジア民族の光輝ある將來を背負つて立上つてゐる。日本の使命は、甚だ重大である。

私は、日本の今日の隆盛あるは、明治維新に依つて、勇敢率直に歐米の進歩的な制度、文物、技術等を取入れ、自己築籠中のものとなしたからであるといつたが、當時のこのアジア民族の歐米文物への信頼と熱望とは、一面においては、歐米の帝國主義のアジアへの進路を作つたものである。

それは、その後の支那、印度、タイ、トルコ、南洋などの實狀が如實に物語つてゐる。その被害の最も多かつたのは、印度、支那、南洋である。

しかし、支那が歐米に依存し、ソ聯の民族政策の傀儡となつた第一の原因は、支那の混亂、従つて國家勢力の弱體にあるが、日本にも遺憾な點がなかつたとは言へない。かういふ事は、公平に批判した方が、雙方の將來の爲めに善いと思ふから敢て言ふが、一九二四年の國民革命の時、孫文の日本への信頼を、當時の當面の政治家の多くが、心から理解し救援してやらなかつたといふ事は、種々な禍根を残してゐる。孫文は、日本を大師として、明治維新に次ぐ、支那革命を遂

行したかつたのだ。それが、日本の政治家に理解されず、己むを得ず歐米依存に走り、ソ聯に頼る結果となつた事は、日支兩國の遺恨事である。

こゝに、支那が、歐米に喰ひ荒され、赤化の練兵場と化す、大きなスキが出来てしまつたのである。

だが、これは當時の日本だけが失策をしたのではなく、日本を別にした他のアジア民族殊に支那の社會層が、己に背後、陶邊よりの國際秘密力に壓倒されてゐたからであらう。が、これを日本だけの問題とすると、當時は己に、明治維新に發揮した程の進歩的革新力に缺けるものがあつた爲めではあるまいか？ この點については、支那事變の處理についても、言ひたい、考へたい事がある。

それは扱て、日露戦争は、アジア民族聯盟の盟主として運命づけられた日本の國を擧げ民族の生命を賭しての決戦であつたが、現在當面する大難局は、日本を中心としてのアジア民族全體の決戦に依つてのみ開かれる、アジア民族の更生の好機會なのである。

それだけに、日本の大陸政策、南進政策は、非常に責任が大きく、永遠の發展性を持つてゐる。それには、先づ、後に遺憾を残さぬやう、革新支那を理解して名策を立てなければならぬ。アジア民族の生命線南洋の重大意義を理解し、アジア民族解放の聖地としなければならぬ。

東亞共同體、東亞共榮圈の樞要な問題は、日本が、その眞摯さを餘力を以て、アジア諸民族の本來の要望を、適切に充す事である。

こゝに餘力といつたのは、餘つた力といふ意ふ意味も、當然含まれてゐるが、餘力を持つほどの充實さの意味の方が強い。即ち、具體的に言へば、國內が緊張して充實し、權威と自信と勇敢さと眞實とを以て、全面的にアジア民族の要望を推行させるだけの國力の謂である。

久しく歐米、ソ聯の意圖のまゝに動かされて來た、全アジア民族の悲願は、帝國主義及びアジア民族の擡頭發展をさまたげる一切のものから、完全に解放され、領土の安全を得て獨立を斷行し、その民族文化を自由に發揚する事である。これが爲めには、日本は所謂餘力を以て經濟的に支援しなければならぬが、この形態は勿論アジア民族聯盟の盟主らしい深い理解と寛大さを持つたものでなければならぬ。

これは口では言ふには易いが、實行となると容易ならぬ困難と犠牲の伴ふ事業である。しかし日本は當然これを爲し遂ぐ可きの、優秀民族的使命の中にある。

### 三 大日本の使命

南洋民族のアジア的特質に就いては、別章で詳述した。

が、今日の南洋民族は、政治的經濟的には歐米の壓迫と搾取の中にあり、人種的には、歐洲民族の血との混交に依つて、本來のアジア性を失ひ、或は薄弱にさせられてゐる。

(この問題も、「民族と混血」の條に説いた。)

この南洋民族の民族的衰態は、殆ど、アジアを食ひ物にしてゐる歐米白人の陰謀なのである。大岩誠氏は「南方民族の問題」——主として印度支那の諸民族について——(「中央公論」昭和十六年八月號)の中で、かう明快に論斷してをられる。

「——日本が彼等の敬慕の的となつたのは日露戦争の結果であつた。此の情勢を敏感に悟つた西洋の諸國殊に英國は日本をアジアの民族から引き離し、日露戦後の偉大な成果であつたアジアの結合を根底から消滅させる様な工作に狂奔した。(註——そのくせ英國系ユダヤ財閥は、日本に軍資金を貸し、本來ならば自分が戦ふ可き筈の帝政ロシアと戦はせたのである。ことに、如何にもユダヤ的なのは、ロシアを日本と戦争さす可く煽動したのは、英國であつた。而も、英國は、日英同盟を結んでゐた。)滅前の燭は能く光を輝す。アジアは其の執拗な離間抑壓の方策に乗ぜられ強力な文化によつて眠らされ、經濟力によつて束縛せられ、恐るべき孤立のうちに各箇擊破の犠牲になつた。(註——それは已にアジアの中に悪性スパイ以上のユダヤリストが——無意識にしろ——ゐた爲めである。今日の蒋介石等がその例である。)東亞の悲劇も此の政策の一つの大きな成果である。こ

の憎むべき成果は支那事變の四ヶ年を通じて見事に之を支那において撃破しつゝある。(註――しかし、曾ては國內にもユダヤイズムの者が澤山ゐた。殊に外交官には、それが多しなどいはれてゐたが、三國同盟以來は、頭のある者は目醒めた様子である。) しかしながらこの撃破戦は更に徹底的に南方においても遂行せられなければならない。蓋し南方問題は支那事變の世界政治性が内有する必然性によつて生起し來つたとともに、この完全な解決は依然として同じ支那事變の完遂に深く係はつてゐるがゆゑである。南方民族の共有する農村問題は民國における同じ問題の解決と相關連し、彼等諸民族の懐く他のアジア民族に對する敵意殊に日本に對して懐くやうに仕向けられてゐる恐怖心は、日滿華三國民の緊密な精神的紐帶が、あらゆる試練を益々克服し、世界の大道たる皇國精神が現實踐せられるに従つて、その敵意の超克と恐怖心の解決が實現せられる。英米は日本に對する南海線戦の崩壊が假令起つたとしても共同の目的と思想を知らぬ南東アジア民族は互に反笠し鬭争するであらうと希望してゐる。この希望は紋上の要請を實踐し具體的に主體アジアの建設を行ふ皇國の前進によつてのみ打ち摧かれる。」

私も、大岩氏と同説同感である。

日本こそ、南洋民族の不幸を、即ち太平洋の不安と混亂と、こゝの民族の苦惱と衰退を救ひ、永遠の幸福と平和を招來すべき、大使命を持つてゐる。

こんな、日本民族に課された現實的問題はない。



昭和十六年十月十五日印刷  
昭和十六年十月二十日發行



東亞文化叢書(11)

南洋の民族と文化

定價一圓六十錢

著者 井 東 憲

發行者 岩 野 眞 雄  
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡 邊 丑 之 助  
東京市芝區愛宕町二ノ十四

配給元 日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡 町二ノ九

東京市芝區芝公園七號地十番

株式會社 大東出版社

振替東京一九四七一番  
電話芝三九四四番

# 東亞文化叢書

實藤惠秀 著

## 1、近代日支文化論

近き八十年來の日支文化關係を検討し、現在における兩國文化上の諸問題を吟味し、將來に於ける文化工作留學生教育の方針を示唆す。斯界の權威者實藤教授の最新刊。

B 六上製  
二八〇頁  
一・八〇  
郵 一四

井東 憲 著

## 2、南洋の民族と文化

東亞共榮圏の一翼たる南洋の重大性を、民族とその文化の方面より闡明したるもの。かくて日本民族と血のつながりある南洋民族への關心と興味は更に加はる。時局下の好讀物。

B 六上製  
二四〇頁  
一・六〇  
郵 一四

西本白川 著

## 3、康熙大帝

支那歴代治政の理想境たる康熙大帝の德行を解剖して王道を註釋し、東方道義國家の再建を力説す。史料精密、考證正確、著者の實踐的風格躍動し、滿洲建國の先聲をなせる名著

B 六上製  
三六〇頁  
二・五〇  
郵 一四

德齡女士著 實藤惠秀譯

## 4、西太后繪卷(上)

支那近代の女傑西太后の公私生活を描いて名聲高き侍女德齡姫の代表作その豪華と、その哀愁を湛へた優婉な實録物語の中に、民族の性格と文化を暗示する清末の宮廷繪卷。

B 六上製  
三〇〇頁  
一・八〇  
郵 一四

大東出版社刊行



